

『人間失格』と人間形成

阿部 高志（総合科学部 1年）

太宰治の『人間失格』を読んで、人生観が変わった。いや、今までの言語化されていない自分の根底にある人生観がこれを読むことで意識化され、それが表に現れてきたのか？ 僕は浪人生活を送る事になってから人が変わってしまった。自分も含めて人間というものが信じられなくなった。生きている事にも疲れ、死すら頭の中に思い描かれていた。そんな時、親が読むつもりで買っておいた『人間失格』があったので、勉強しながら通学の途中に読んでみると、その時の自分と主人公との考え方というか思想というか、そのようなものが非常に似ており、本の中で自分が考え、話し、行動しているかのような錯覚をおぼえた。そしてこれを読むことで、当時の自分と同じように、自分に対して否定的に生きている人間がいるのだという不安からの解放と、また、この本を読んだ感覚で友達と話をしてみて、人生に苦しんでいるのが自分だけではないだとわかり、さらに自分に対する自惚れや甘えに気付き、荒んだ精神状態から徐々に引きあげられていくような気になった。

僕と『人間失格』にはこのようなエピソードがあるのだが、このような僕を支えた『人間失格』やその主人公がどのようなものであったのか書きたいと思うが、自分の表現力が足りないので、うしろの解説を見て書くと、「作者はまず主人公を、人間社会の異邦人として設定する。自分は世界の営みから疎外され、外界との生ける接触感がなく、自分だけが人と異なる内的な自閉世界に住み、エラン・ヴィタールつまり生きるためのエゴイズム、生活力が不足していて、人間が信じられず、人間におそれを抱いているが、けれどどうにかして人間らしい人間になりたい、人を愛し、信じたい、自分を偽らず真実に生きた



このコーナーでは、本とあなたにまつわるエピソードをお待ちしています。学生、教官、その他学外など何ぞ問いません。飛翔編集室まで持ってきて下さい。

た。普段は、同乗する国立図書館の職員が子供を集めて絵本を読み聞かせるのだが、今回は挨拶程度のラオ語しか知らない私達がお話を聞いた。動物の鳴声や身振り手振りをとりまぜてのお話し会に、多くの子供が集まり、笑いながら喜んで聴いてくれた。私達も、「これはラオ語でなんというの？」と教わったながら、楽しい時間を過ごした。

日本の絵本にラオ語訳をつけて利用するという方法は、ちょっとした文化交流になる。ラオスの子供たちは、絵本を通じて多くの日本文化を知る。見慣れぬ服装、家、食べ物。絵本の世界は案外その国独自の文化を映し出しているものだ。一方で、日本の絵本を使うことに問題がないわけではない。ラオスで降ることのない雪や、子供が口にできることはまずないケーキなどは理解できないし、また一つ一つ手作業で行われる訳語貼りは冊数に限界がある。何より、独自のラオス文化というものが継承されなくなってしまう危険性がある。そのため、ラオス独自の絵本出版が望まれているが、出版社が育ち、子供向けの絵本を出版できるようになる見通しは暗いというのが現実である。

SVA事務所では、開発援助に関するのみならず多くのことを学ばせていただいた。物の大切さについてもその一つである。事務所では、紙を片面使用だけで捨ててしまうなどということはまずない。必ず両面使用され、最後には子供たちの折り紙になる。中には数学のテスト用紙の裏が使われていることもあり、これは事務所の方が日本に帰国した際に母校を訪れて不用紙をもらってきたものだそうだ。日本での自分の生活を振り返り、深く反省した。私達は、途上国に手を差し伸べると同時に、自国の生活についても見直していく必要があるのではないかだろうか。

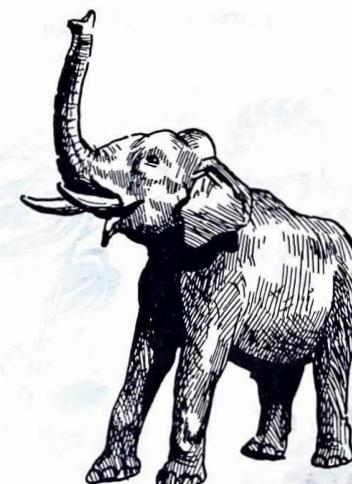
当初はボランティアとして役に立つつもりでお世話になった私達だったが、お手伝いといえる程役に立つことは全くできなかった。むしろ事務所の方の手を煩わせながら多くの



ことを学ばせていただき、自らの無知、非力を深く感じた。2週間という短期間ではあったが、「日本の市民ドナーと被援助国の市民とをつなぐNGO」（ラオス事務所長 小野豪大さん）の今後担っていくであろう役割の大きさを感じた。私も今後何らかの形で支援活動に参りたいと思うし、また多くの人々からその理念への理解、協賛を得られればと思う。

最後にSVAで研修をするにあたって御協力いただいた浜渦先生、暖かく迎えていただいたSVAラオス事務所の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

（社会科学コース3年 磯野 央子）



卒業論文題目紹介

特別研究論文題目

指導教官

学生氏名

人間文化コース

照屋 敦	いかにして実在との接触を果たすか—マイケル・ボランニーの認識論
野中 歩	納西族「情死」考
松井 清正	トランスパーソナルの視点 スタニスラフ・グロフの場合
足立 智弘	大島渚研究—映画「日本の夜と霧」における「作家」性について—
石田 敦子	言語と映像
戎屋 和佳	大学で学ぶことをめぐる試論～1998年、総合科07の僕らの対話を通じて
中川 政俊	美術論
原田 美希	『グリム童話』にみるヨーロッパの死の歴史
松浦 誠司	映画における民族性
	～アメリカ映画テクスト内における民族的、人種的矛盾の発見～
光安健太郎	須田創太研究～長谷川三郎、吉原治良との歩み～
村田 知保	太宰治作品にみる陶酔と覚醒～男性像と女性像

地域文化コース

田中 智	従軍慰安婦論争の底流
丹後 善晴	中国の経済発展と日本の役割—大連を中心として
浅原 健一	「インテリア雑貨店」の立地と機能—東京都心部とその周辺を事例に—
石川 幹子	ボランティアの国際比較～中国におけるボランティア発展の意義～
川上 慎治	日本におけるコミュニーター航空の形成と現状—西瀬戸エアリンクを事例に
菊地 栄治	在日朝鮮人の民族性の維持と帰化～三世を中心として～
小島 祥一	日本書紀の史料学的検討～紀年の暦法と組み立てについて～
小山 直子	「ドイツ現代社会における戦争責任意識のうつりかわり
	～歴史家論争からゴールドハーゲン論争へ～
笛尾ゆかり	「ワーズワスにおける精神の危機と超克」
	～『序曲』における「内面を看透する目」を軸に～
竹本 華子	日本の大学生にみる若者像—広島大学の学生へのインタビュー事例から～
太房 恵子	日本人のしつけ～恥を中心とする意識構造の形成～
遠山 雄平	幕臣川路聖謨と『海国図志』
中原ゆうこ	本居宣長の古代観
平井奈緒美	日系アメリカ人二世の強制収容所体験
古田 信行	日本人の孤観—「語り」世界における様相
細川美由紀	中国における家庭教育の現状と課題
前田しのぶ	ガウディ建築における装飾と構造の融合
	～アール・ヌーヴォー及びモデルニスモ建築の比較を通して～
宮本佳代子	近代イギリスにおけるコーラーからティーへの移行
	～「スペクター」とその背景～
三輪誠一郎	中世前期の身分制について—舞人・楽人の存在形態を通じて—
村田 明代	理想郷としてのハブスブルク帝国
	～ヨーゼフ・ロートによる「オーストリア人」の祖国～
村田いつみ	絵本表現上に見られる現代日本の家族觀
森光 香織	アメリカにおける1920年代の広告
彌永 麻衣	トマス・クックの旅行業とその時代

社会科学コース

池田 康介	外務省に関する一考察～外務次官登用過程による統計分析～
腰越 善行	「警察官による所持品検査の適法性」
佐々木美保	「三峠ダム建設をめぐる諸問題—なぜ建設に踏み切ったのか—」
渡邊 忠信	冷戦期日本共産党に関する一考察
有馬 亜季	大英帝國の崩壊～帝國維持をめぐる英米関係
石田 聰子	高齢者の社会的ネットワークと幸福感
入江 洋彦	フリートレードゾーンの意義と限界～沖縄のフリートレードゾーン導入を通じて～
太田 直哉	ソフトウェアの会計処理に関する一考察
桑村 賴	90年代における若者のアイデンティティ
	～E・H・エリクソンのアイデンティティ論を通じて～
古高 卓	モバイルコンピューティングの現状と
	企業の情報システムのモバイル化に関する一考察

卒論テーマ紹介

— 卒論テーマ紹介 —

児玉 愛子	安全配慮義務の法的性質について	富井 利安
後藤 陽介	「アダルト・チルドレン研究の展開と課題～概念の定着化に関する一考察～」	材木 和雄
島田 志穂	「供食障害に関する社会学的考察～その最近の動向と治療法の可能性～」	石倉 康次
新名主敏史	不登校問題の医療化と対抗的定義—構築主義ベースベクトルの視点から	石倉 康次
陣内 麻子	大卒女性の生活意識とライフコース	西村 雄郎
内藤 大義	東京裁判に関する一考察	小池 聖一
中川 孝子	APECにおける政治的一考察	小池 聖一
中谷 勝	軍備管理論の現状～モートン・H・ハルベルリンを中心に～	小池 聖一
中野 洞美	高齢者福祉政策分析～広島市老人保健福祉計画を一例に～	小池 聖一
西村 章子	イギリスのEEC加盟申請への道	岩田 寛司
	～転換点としてのEFTAが果たした役割～	山崎 修嗣
畠本 明義	「WTOにおける日本フィルム権利の処理に関する一考察」	岩田 寛司
早見 圭子	ロシア民族主義の台頭とソ連崩壊	岩田 寛司
	～ロシア民族主義がソ連崩壊に果たした役割について～	小池 聖一
姫野 望	国民経済興明（1949～52）における中国共産党の対資本家政策	岩田 寛司
松村 真澄	ニクソン政権の对中国政策	岩田 寛司
	～ベトナム戦争の終結を目指す	西村 雄郎
	～アメリカの対ソ・リンクージ戦略を踏まえて～	富井 利安
眞部 浩一	「近代的「大人」像の崩壊—新たな生き方を求めて～」	西村 雄郎
横山 友美	製造物責任法と企業による安全対策	富井 利安
和田菜穂子	異文化経営における現地化問題	浜渦 哲雄
	～日本比較とマレーシアのケーススタディーを通して～	
外 国 コ ース		
穴見 律子	フランス語に見られる数量の概念と冠詞	井口 容子
安藤 梢	シャルル・ペローの作品について～ペロー作品の二面性～	平手 友彦
岩佐 美穂	Class Consciousness Reflected in English Popular Recreation (英國民眾文化に見られる階級意識)	栗田 圭治
金崎 幸子	On the Reanalysis Hypothesis and Binding再分析仮説と束縛について	岩倉 國浩
河村まみ子	The Early First Language Phonologies of English and Japanese (英語と日本語における幼児期の第一言語音韻論)	スケアー、 ビーター・マッコール
木塚 華子	類似する前置詞の比較 ～en, dans, aについて～	井口 容子
坂野 友香	The Feasibility of Shakespeare's Romeo and Juliet as a Postmodern Spectacle rather than a Classic Drama (古典的ドラマというよりむしろ次の現代的ショーとしての シェークスピアの「ロミオとジュリエット」の可能性)	デブ・トマス・ウイン
薄口 智子	THE SIGNIFICANCE OF HOME IN HAWTHORNE'S THE GENTLE BOY IN COMPARISON TO ROGER MALVIN'S BURIAL ホーリー作「優しい少年」における「HOME」の重要性 ～「ロジャーマルヴィンの埋葬」と比較して～	伊藤 詔子
間城美奈子	フランス小説のなかの人物像 ～「ナラジス」における人物描写についての考察～	平手 友彦
蝶谷 恵子	AN INTRODUCTION TO THE PATTERNS OF CASUAL SPOKEN ENGLISH (カジュアルな場で話される英語表現 パターンの導入)	スケアー、 ビーター・マッコール
竹内 紗美	Learning the Phonology of English as a Second or Foreign Language: Maturational Differences 第2言語あるいは外国語としての英語音韻学習と年齢差	スケアー、 ビーター・マッコール
田村久美子	A Pragmatic Study Of Japanese Shortened Expressions Of Greetings 省略あいさつ語の意味論的考察	鍾田 勇
内藤 優子	エリック・メルル「いいのランデヴーにおけるパリ ～背景効果の考察から～」	平手 友彦
中崎 快	Brooklyn Narratives: Interpreting the Character of Place in Literature and Film ブルックリン ナラティブ： 文学や映画の中で描かれる地域・場所の性質・特徴の解釈	シュライナー、 クリストファー・S
中島 鮎子	A Study of Sir John Falstaff 「サー・ジョン・フォルスタッフ」についての一考察	飯田 操
中野 千佳	Making Up: The Effect of Familiarity in Conversation 申し開きの多様性：近さと遠さとの効果	スティーブ、 コートラン・ラン
中村 有里	中国・韓国における同姓团体についての比較考察	盧 淳
種口 友乃	The Structure of Howards End by E. M. Forster E. M. フォアスターの「ハウアーズ・エンド」の構造 日本語オノマトペとドイツ語表現の比較	妻田 圭治 岡崎 忠弘
松崎 弘美		

三宅 剛史 Primate Language (猿の言語)

森 亜矢子 A Study of William Morris: His View on Labour (ウィリアム・モリス研究～その仕事観)

数理情報科学コース

川下 義照	微分方程式の歴史及び解法
中間 盛之	手話学習システム用手話単語特徴の抽出
鶴嶽 憲悟	設計支援における幾何モデル操作
山口 貴志	制約条件に基づいたハーメトリック円錐曲線
池田 佳史	微分方程式による数学モデルとその解法
木村 達彦	制約充足問題と遺伝的アルゴリズム
久保 尚史	制約の管理による形状処理
末光 昌和	パターン認識における動的側面
田島 知洋	数学的模型による日本人の成長の特徴づけ
中山 里志	神経回路網のカオスを用いた不良設定問題解法
深澤 哲	暗号とネットワークセキュリティについて
福島 純一	手話動画像の意味的画像圧縮技術の開発
松浦 康之	文字フォント認識の定量的評価
松本 学	双曲幾何の古典的モデル
三上 小吾	神経回路網におけるカオスと記憶ダイナミクス
山本 哲嗣	非線形動力学におけるカオス現象の解析
横奥 宏明	ナッシュ均衡解を求めるためのアルゴリズムに関する研究
和田 昌人	セルオートマトンによる暗信号の圧縮に関する基礎的研究

物質生命科学コース

宮崎 久暁	ポリエチレンの結晶核生成速度の分子量依存性
石川 大介	液体半導体の光誘起現象に関する研究 —過渡電気伝導度測定用高圧容器の開発—
福井 雄人	脊椎動物の脳内ニューロステロイドの変動とその制御機構
今井 純也	生物活性ケシノイドの研究(中国産ニガキ科植物の場合)
岡田 宏成	希土類化合物永久磁石 Sm2Fe17N3の保磁力の改善
小倉香奈恵	中国産イチイ(Taxus chinensis)の成分研究
越智 寛哉	増幅した遺伝子領域の複製タイミングに関する検討
門田 隆	海水ウナギにおける飲水行動の解析
鎌倉 清明	La系超伝導体のラマン散乱
川口 典子	アフリカツメガエルの初期発生における核局化シグナルをもつ未知遺伝子の発現と機能について
川崎 千晶	メカニカルアロイング法によるMg系水素吸蔵合金の開発研究
川崎 浩史	副腎皮質ホルモンの生合成調節におけるSTARタンパク質の役割
木原 将平	液体3Heにおける不純物散乱問題
喜代吉信子	特定染色体領域に濃縮される核マトリックス構成RNAの解析
合田奈緒子	両生類発生における甲状腺ホルモンによる変態誘導の反応路筋について
重松 志穂	染色体外遺伝因子の細胞内動態を支配するシス構造の解析
新木 大輔	ニューロステロイドの作用機構に関する解析
新谷 紀幸	ラット小脳一酰化窒素合酸酵素(nNOS)の連続反応の制御機構
西松 英幸	ポリエチレン結晶化におけるメルト・メモリー効果の解明
廣瀬 一成	ミトコンドリアND5遺伝子の塩基配列による 中国地方産ギフチョウの個体群解析(予報)
福元 誠	シロオビアゲハ(Papilio polytes)の幼虫および 蛹前翅芽の発生解剖学的研究—翅脈と鱗粉の発生における気管系の役割
松坂 鉄矢	放射光を用いた超臨界金属流体の構造解析
安永 創	環境適応にともない発現の変化するトビレセ皮膚の遺伝子
吉富 智美	ステロイド産生急性調節タンパク質(STARタンパク質)の活性分子種の検出

自然環境研究コース

新宮原秀和	岡山県旭町地域における三郡変成岩の表層崩壊過程
千葉 静香	微細藻類と細菌による亜酸化窒素の変換についての研究
安道 幸仁	亞高山帯山地流域の生物地球化学過程を考慮した酸緩衝能の空間分布特性
磯崎 由行	広島県東部地域の景観構造の解析

ゴールズベリ、
ピーター・アンソニー

飯田 操

柴田徹太郎
宮尾 淳一
山縣 敬一
山縣 敬一
吉田 清
山縣 敬一
奈良 重俊
正法地 孝雄
奈良 重俊
中原 早生
宮尾 淳一
原田 耕一
阿賀岡芳夫
奈良 重俊
中山 裕道
水上 孝一
奈良 重俊

彦坂 正道

田村剛三郎
筒井 和義
岡野 正義
藤井 博信
深宮 肇彦
清水 典明
安藤 正昭
宇田川真行
河原 明
浴野 稔一
小南 思郎
永井 克彦
清水 典明
河原 明
河原 明
筒井 和義
渡辺 一雄

於保 幸正
設楽 惣助
安藤 正昭
小野寺真一
中越 信和

今田 幸作
梅木 健一大崎惠美子
大城 直史大谷 佳子
小笠原禎子

越智 彩子

亀田 実和

河合慎一郎

川口有香子

河村 多信

木田 愛子

工藤 琢人

久保田 要

佐々木 将

妹尾 薫

竹田 浩之

田中 敬子

辻 圭一

中川 直子

中谷 亜紀

早川 道夫

溝尾 陽子

村井 知里

村井 俊夫

八束 陽介

柳井田忠茂

生体行動科学コース

樋 葵昭

福岡 千夏

上野あゆみ

大石 稔司

大瀬良勇一

大脇亜希子

岡 俊介

景山 聰之

久保 理香

小島 美子

小林 一生

小松梨絵子

作村 雅之

佐合 秀康

篠崎 陽一

城崎 章

竹内 正樹

土井 祥徳

中川 綾子

尾藤 貴宏

福島 宏和

藤田しのぶ

藤田 隆志

古川 明子

満田 菜美

山下 和洋

渡邊 将彦

電磁波TDR法による水分と塩分の測定
上石流の流動メカニズムに関する基礎的研究

—衝撃的な外力の飽和地盤への影響についての考察—

生育環境の異なるアカマツ林の同化量分配及び相対成長関係の比較

広島県恵美須山におけるアカマツ葉上乾性降下物

および葉内成分の測定法に関する研究

マツマグラカミキリ成虫の精子質換

企業活動における環境パフォーマンス評価に関する研究～CO2発生量評価を行って～

都市化における土地利用変化の解析と類型化

アカマツ枯損林からブナ科落葉広葉樹への林相転換に関する研究

公共空間における散乱ごみ発生と削減行動を規定する因子についての研究～散乱ごみ発生と削減行動を規定する因子についての研究～

密閉による幹・枝の呼吸速度測定方法の検討

水銀原子等の過渡的吸収の測定に関する研究

ICP-MSによる大気粉じん中の希土類の測定

コナラ林における光環境と光合成特性

ブナ科常緑林の肥大生長特性

佐々木将の貢献

アカマツ林の根形成

植物細胞分泌タンパク質の機能と構造解析

温度環境の異なる森林におけるイワグレゴケの分解と菌類バイオマス

マツ枯れ地域のマツ葉中の植物ホルモン(アブジンジン酸)の動態

マツノマグラカミキリ雌の交尾戦略と堆積競争の勝敗に関与する要因

アカマツ単木の落葉の研究

長登山地域におけるスカルプ床鉄床の鉱物学的研究

窒素除去による汚水浄化における濾材の役割

山地流域における人工林施業にともなう土壤劣化について～関東山地の例～

小野寺真一

吉川 友章

堀越 孝雄

柳井直樹

榎井 勝博

柳井直樹

開発 一郎

海堀 正博

中根 周歩

佐久川 弘

富樫 一巳

早瀬 光司

堀越 孝雄

藤原耕多夫

藤原耕多夫

中根 周歩

中越 信和

吉川 友章

堀越 孝雄

桜井 直樹

設楽 惣助

桜井 直樹

富樫 一巳

開発 一郎

福岡 正人

設楽 惣助

坂田 省吾

開 あゆ

浦 光博

黒川 正流

和田 正信

坂田 桐子

坂田 桐子

調枝 孝治

岩永 誠

安藤 正昭

岩永 誠

筒井 和義

赤堀 奥造

上嶺 達之

領 達之

生和 秀敏

浦 光博

堀 忠雄

林 光緒

手島 圭三

閻天 寛史

筒井 和義

和田 正信

新垣 茂充

安藤 正昭

新任教官紹介

岡本 篤尚 (社会科学コース 助教授)



1959年島根県松江市生まれ。島根県立松江北高等学校卒業。専修大学大学院法学研究科公法學専攻博士後期課程修了。博士（法學）。専修大学法學部非常勤講師等を経て1999年3月より広島大学総合科学部助教授。憲法・法政策論。広島大学にはこの3月に来たばかりの「新入生」です。20年以上も東京近郊で生活してきました。向こうでは、アパートから歩いて5分以内のところに、デパートが1軒、大型スーパー2軒、コンビニが5軒ありました。こちらでは、最寄りのコンビニまで30分近くかかるので結構大変ですが、最近ではそんな「不便」な生活もいいかなと思っています。ただし、大学近郊に落ち着けるゆったりした雰囲気の喫茶店と専門書店がないのには閉口しています。誰か知っていたら教えてください。

庄司 文由 (情報教育センター 助手)

こんにちは、情報教育研究センター助手の庄司 文由（しょうじ ふみよし）です。私は山形生まれの山形育ちです。みなさんは山形県がどこにあるかご存知でしょうか。ちなみに広島に来てからいろんな人にこの問い合わせかけましたが、正確に答えられた人はほとんどいませんでした。もっとも私だって九州や山陰地方の県の配置はよく分かっていないので、何も言えないのですが。では、山形について、あるいはコンピュータについてご質問のある方は、情報教育研究センター準備室にてお待ちしておりますのでお気軽にお越し下さい。

田中 秀利 (学生就職センター 教授)



33年間の民間企業の実務を経て、学生就職センターの教授に就任。就職講義、就職相談、各学部との連携等を担当することになりました。就職はキャリア開発の通過点であるとの視点から、自己発見や人探求のプロセスを共有し、学び合える関係づくりを望んでいます。趣味は「料理」「一輪車」「ジャグリング」。6年間のアメリカでの単身生活では、買い物、料理、洗濯、掃除、アイロン掛け等をこなし、自活力を養成。生涯現役の生活基盤ができました。学生就職センター（大学会館内）にいます。話においでください。

ルーサー、アリス・ハミルトン (外国语コース 外国人教師)



Dr. Alice Hamilton Luther is a Full Professor of Theatre and Dramatic Arts at the University of Lethbridge in Alberta, Canada. She is currently a Visiting Foreign Professor with the Faculty of Integrated Arts and Sciences at Hiroshima University. Luther's research interests include Theatre for Young Audiences; Asian theatre influences on western forms; the use of dramatic activity in foreign language teaching; and directing for the stage. Most recently, she directed Alden Nowlan and Walter Learning's FRANKENSTEIN: THE MAN WHO BECAME GOD, as part of the main stage season at the University of Lethbridge. At Hiroshima University, Luther teaches British and American Literature.

読者からの声

中山 裕道 (数理情報科学コース)

読者の声を書くようにとの依頼があった。昨年度、広報委員会の中の飛翔担当をしていましたので、このような役目が回ってきたのかと思う。「隅から隅まで何回も読んだので、きっと僕が一番良い読者に違いない」と豪語しちゃいかもしれない。

読者の立場から改めて飛翔を読んでみた。表紙に続く写真、こったレイアウトなど、いきいきした学生生活がにじみでているように思う。飛翔は、基本的には学生、事務官、教官の3者により作られることになっているが、おむね学生主体で編集されている。その点が紙面に如実に反映されていて、好感が持てる。

数年前、回収騒ぎが起きた。差別的な表現が含まれているとして、大量の飛翔が回収された。こういうことが起きると、飛翔とは何かという議論がでてくる。表紙を見ると、総合科学部報との厳めしいタイトルの下、広報委員会発行となっている。当然、差別的な表現がふさわしいとは思えない。このとき、再発防止のためのチェック体制が確立された（私が何回も読んだいきさつでもある）。

昨年度も校正にあたっていくつかの点で議論がおき、飛翔とは何かという話を何回も聞かされた。飛翔は「広報誌」である、いや「（学生が）考える場」である。同じ議論が何度も繰り返された。いっそ教官だけが編集すべきだという意見まであがった。話によると教官が編集していた時期もあったそうだが、しばらくして廃刊問題へと発展したそうだ。

加谷浩基 (社会科学コース 3年)

「飛翔」は発行元となっている総合科学部の学部生だけでなく、学部外の学生、また教官の方々など、さまざまの読者層を相手に編集しなければならず大変なことだと思います。どの読者層に向けてのテーマなのか、また全ての読者層にまたがってのテーマなのか、その辺を踏まえての毎号毎号の記事の作成・編集、これに携わっている学生の皆さんのが努力と苦労を思うといつも感心する思いです。

「飛翔」が総科の機関誌としてある限り、編集委員である学生と教官の方々との連携は避けて通れないことだと思います。研究室紹介はもとより、特集を初めとするテーマ、記事の推敲など、学生だけの力では成り立たないものも多いと思います。公の場へと発行される以上、その記事を作成する上で学生だけでは判断・基準の限界が必ずあるはずです。前述したように、この「飛翔」が様々な層の読者を相手にするためには、その果たす意味・位置に幅を利かす為にも、学生・教官相互にわたる協力を心掛けて欲しいものです。

あと、読者として一つ要望があるとするならば、このような学部の機関誌が存在し、また学生の手で発行されている事実を、学部生にもっと浸透させるべきではないでしょうか。そのためにも委員の皆さんには、編集だけでなく広報にも力を入れていただきたいです。そうすることによって、「飛翔」の果たす役割は大きくなること思います。今後のさらなる飛翔を期待しつつ文を締めたいと思います。

編集後記

■竹田 慶 (学生編集長 自然科学研究コース2年)

前号の56号で出された反省が山ほど積み重ねられた状態で始まった今号。改革していくことはなかなか大変なもので、やろうとしている事は半分くらいしかできなかったと思う。それでもいろいろな人に協力・応援してもらい、何とか発行に至った。この場を借りて感謝の意を表したい。有り難うございました。

新メンバーがたくさん入ってきて、より一層活気に溢れてきた編集室。居候も頼え、なかなか收拾がつかなくなってきた。飛翔の内容をよくするには編集委員を整備するのも大事だろう。身近なところから一つ一つ改善していくこうと思う。物事を成し遂げるには、「そこまでやるか」と言われるくらい徹底してやる事が必要だということを今号学んだ。これを内に秘め次号頑張りたいと思う。



てホームページ（ニューヴァージョン）を作ったので見て下さい。

■二番隊組長ゆうへい

(1年 IAF・体操部所属 居候)

あのー、正式編集委員じゃないんですけどー…。あのー、編集作業辛かった!! (ウソ) 58号の編集もガンバルズ、っと (ホント)。私もホームページ開いてますのでハズビーンともども、よろしくお願ひします。いやー、飛翔ってわけわかんないとこですね~。こんな関係ない人に編集後記書かせるなんて。次号僕と一緒に飛翔を創ってみませんか?面白いかもしれないよ。



■吉田 昭子 (学生副編集長 地域文化コース2年)

只今、7月27日午後2時です。締め切りをのばしつつ、もう7月も終わろうとしています。今日は雨で久しぶりに涼しい1日です。去年に比べるとコンピュータもだいぶ使えるようになったし、レイアウトもできるようになったし、特集も何とかできたり、ぞうさんのかわいい絵も見つけたし。うん、少しは成長したかな。飛翔のみなさま、飛翔じゃないのに作業を手伝ってくれたみなさま、ほんとうにお疲れさまでございまして。新しい編集委員は年中無休、24時間体制で募集していますので、みんな遊びに来て下さいね。決して怪しい人ばかりじゃありませんから… (注:一部を除く) ではまた。さようなら。

■前田 健太郎 (地域文化コース2年)

今回の57号をもって飛翔を脱退します。学業に専念します。

■三浦和歌子 (自然環境研究コース2年)

書けっていったくせに。どこにかきやあいいのさ。かいちろう。わっこ。もとい、あらためて。

今号もまた忙しい時期にさぼったり、中国へ逃亡したりしてしまい、周りのみなさまに多大な迷惑をおかけしたことを反省しております。来年もがんばりますのでよろしくおねがいします。

■ハズビーン (1年・数理情報コース志望)

特集の記事作成時期（テスト期間）に、平行し

■ネズミ男ことのび太 (1年)

今日は7月27日。〆切は6月30日だったはずだけまだ書きあげていません。明日は原稿業者提出だしつ。次の58号ねー。まだ参加するかどうか未定。(こんなこといつきながら次もやってるよう気がするなあー)

■飯寺 純子 (地域文化コース3年)

今回は前回に輪をかけて大変そうでしたね、全てが…。でもタバコ特集、無事に出来て良かったです。お疲れさま(^▽^)

■石川友実子 (社会科学コース3年)

今回はなかなか厳しかったです。両立って大変なのね。そんでもって、ジェネレーション・ギャップを相当感じる数ヶ月でした。ああ、若いってすばらしい。

■森岡 ナナ (社会科学コース3年)

若さに溢れた1・2年生が入ってきて狂喜乱舞したのもつかの間、自分の老いを痛感。それでいて見た目・中身ともに未発達の先輩で、いろいろ



と迷惑かけました。みなさんどうもありがとうございます。それでもせめて大学生には見たいなあ…。

■大谷 貴重 (1年・生体行動コース志望)

今回は、はじめての編集作業でいろいろと分からることもあり大変でした。57号には絵を描いてみました。

■園田 陽平 (1年・物質生命科学コース志望)

今回飛翔編集に加わり、他の人に何かを伝えることの楽しさと楽しさを知った。他の人に記事を見やすくわかりやすく伝えるためには、時間とアイディアとの戦いである。これを軽減し、かつ活字を操ることの楽しさを教えてくれたのが、他でもない『一太郎』だった。一覧表の枠線から文字飾りやレイアウトまで、この一本で納得のいくも

のができた。
操作方法を丁寧に教えていただいた先輩方に感謝。

■近澤 康平 (生体行動科学コース2年)

身近なハラスメントについて考えてみて下さい。

■本多 由佳 (1年)

あのー。いいんでしょうか。私がこんな所に書いて。

■田嶋 洋平 (社会科学コース2年)

オリキャンスタッフを通じて、疑問が生まれ、俺は二年にも関わらず、ここに来た。総科のみんなに考えて欲しいこと、考えねばいけないと思うことがあったからだ。残念ながら、今回は既に特集が決まっていたこともあって、自分自身、積極的ではなかった。仕事あまりしなかったと思う。反省。次のはもっと頑張らにやあいけんと思う。

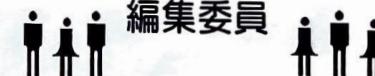
■北 いづみ (数理情報科学コース2年)

いろいろな人に迷惑をかけてしまったかも(仕事もあり?しなかったし)。とくに、しょうわがままを聞いてくれてありがとう。

■岡田 聖香 (1年)

飛翔の仕事は楽しかったです。でも、飛翔の部屋に入るまでが、今でも少し怖いです。ミステリアスな雰囲気ですね。

編集委員



教官: 西村 雄郎 (編集長、社会科学コース 助教授)

石川 雅隆 (外国語コース 助教授)

武田 隆義 (物質生命科学コース 助教授)

事務: 玉田 寛 (学生部)

学生:

青松 伴晃 (人間科学コース)

飯寺 純子 (地域文化コース)

石川友実子 (社会科学コース)

松田理恵子 (外国語コース)

森岡 ナナ (社会科学コース)

: 2年

竹田 慶 (自然環境研究コース)

吉田 昭子 (地域文化コース)

有田 夏子 (社会科学コース)

北 いづみ (数理科学コース)

田嶋 洋平 (社会科学コース)

田中 真弓 (外国語コース)

近澤 康平 (生体行動コース)

前田健太郎 (地域文化コース)

三浦和歌子 (自然環境研究コース)

: 1年

阿部 高志 阿部美恵子

秋寄喜多郎 大谷 貴重

岡田 聖香 鮫島 和美

園田 陽平 田村 幸子

中野 智之 比本奈津実

本多 由佳 船田亜矢子

松下寿賀子 村田圭太郎

: 助っ人

石橋 淳也 (生体行動コース 4年)

松永 孝治 (自然環境コース 4年)

前田 和寛 (生体行動コース 3年)

古谷嘉一郎 (生体行動コース 2年)

宮本 尚人 (自然環境研究コース 2年)

: 居候

松田 敏英 (自然環境研究コース 2年)

山崎 雄平 (1年)

飛翔伝言板

●お詫びと訂正

飛翔56号の記事について、P12の研究室紹介「シャピロ、ジェローム F.研究室」の中で職名が「講師」と書いてありますが、「助教授」の間違いです。これは編集委員の編集上のミスであり、シャピロ、ジェローム F.先生及び関係各位様には大変ご迷惑をおかけする結果となりました。お詫びして訂正します。

以後このような事のないよう、校正には十分気をつけますので、何卒ご容赦下さい。また、万一このようなミスを発見した方は、飛翔までご一報下さい。

●卒業生への通信

卒業2年目以降の方に対しては、希望者のみに送付することになっています。引き続き「飛翔」の郵送を希望される卒業生は、1999年12月末までに下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739-0046 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部飛翔編集委員会

★『飛翔』は年2回発行、春と秋に配布します。

<編集委員募集>

現在この団体では活気があつてやる気がある人を求めていきます。イラスト書きたい！文章書きたい！とりあえず何かしたい！交流関係を深めたい！等々動機は問いません。とりあえずノックしてみて下さい。



ちょっとは入りづらいな…と思ってるあなた！この「飛翔」を持って総務事務棟付近をうろうろしてみて下さい。きっと誰かが声をかけてくれるでしょう。もちろん年齢・経験その他一切問いません。



とりあえず来てみんしゃい。ね？楽しいけん。

(たぶん…)

<投稿記事募集>

皆さん、今の生活に疑問を持っていますか？社会に対して何か言いたいことはありませんか？何かを感じている君やそうでない人たちにいいたい。もう一步踏み込んでみませんか。そうすれば、きっと何かが見えてくるはずです。

この「飛翔」はそんな一步になります。あなたの意見はきっと誰かに伝わります。そのためにも、この「飛翔」に投稿してみませんか。きっと何かの経験として役に立ちます。私たちは皆さんのその声を心待ちにしています。どうか、とりあえず声をかけてみて下さい。

(本当は投稿記事不足なだけだったりして…)

みんな、ささえあって…
助けあって…
自分のくつで
あるいてゆく…

